

## 近世後期の詩社における学習活動

—伊勢山田恒心社を事例として—

山本佐貴

(2001年9月28日受理)

The Learning of the Poetry Circles in the Last Part of the Edo Period  
— A Case Study of Koushinsha in Ise-Yamada —

YAMAMOTO Saki

In the last part of Edo period, the number of the people who had a taste for Chinese poetry increased rapidly. Many poetry circles formed in various places where amateur poets actively engaged in poem-writings. This paper aims to clarify what kind of activities had been taken place within the poetry circle "koushinsha" in Ise-Yamada. Koushinsha is well known for its relationship with Katei Hojo, who was the hero in Ogai Mori's novels, *Hojo Katei* and *The Last Year of Katei's Life*. Some previous studies mentioned the activities of Koushinsha as relating to Katei Hojo, but substantive research has not been done on the learning activity of Koushinsha itself.

Therefore, this paper will investigate the actual condition of the poetry circles which were the place of study for intellectuals in that period. Materials to be used, mainly, include daily and memorandum of Keiken Kawasaki that was one of the member of Koushinsha.

Key Words : Chinese Poetry, Poetry Circle, Learning

キーワード：漢詩、詩社、学習活動

### はじめに

本論の目的は、伊勢山田に存在した詩社恒心社を事例として、近世後期における詩社の活動を明らかにすることにある。

恒心社については、森鷗外がその著作『北条霞亭』『霞亭生涯の末一年』に主人公北条霞亭との交友関係を記したことで知られている<sup>(1)</sup>。尾形侑は、鷗外が主資料としての矢文書の整理を行い、鷗外が見ることのなかった資料を加え、鷗外が明らかにし得なかった事実についても指摘した<sup>(2)</sup>。それによって、恒心社についても次のような事柄が判明している。

恒心社は、伊勢神宮の御師山口凹巷(1772-1830)を

盟主とする詩社である。恒心社社友と北条霞亭は、恒心社の結成以前から交友を持っていた。霞亭に他家への養子の話が持ち上がった時には、山口凹巷や社友河崎敬軒らが忠告を与え、これを思いとどませた。霞亭が34歳で菅茶山の廉塾都講として迎えられるまで、恒心社社友は霞亭を経済的にも援助した。

以上のように、先行研究は特に北条霞亭との係わりにおいてのみ恒心社に注目していたといえるだろう。従って、恒心社の活動そのものは明らかでない。

最近では、近世の学びの場は、藩校や手習塾のみではなく多様に広がっていたことが個々の研究によって明らかにされつつあるといえよう<sup>(3)</sup>。また近世後期には多くの詩社が各地に発生したことも知られている。詩社は近世知識人たちの学習の場である。近世の学習活動の一形態として、詩社における学習活動を明らかにする必要がある。

以上のような問題意識にもとづいて、本論では、社友の一人であった河崎敬軒の日記(『敬軒日記』11冊)、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：仙波克也(主任指導教官)、坂越正樹、佐藤尚子、大林正昭

雑記等（『学礼漫録』4冊、『敬軒漫録』12冊、『敬軒彙』、『敬軒抄録』以上、河崎久弥氏所蔵）を用い、恒心社の活動の実態を明らかにする。すなわち、恒心社にはどれくらいの社友がいたのか、どのような人々の集まりだったのか、彼らはどのような人生観を持っていたのか、彼らの日々の活動はどのようなものだったのか、例会はどのくらいの頻度で開かれ、どのように作詩を行っていたのか、また彼らはどのように活動を発展させようとしていたのかといった事実である。これらを通して、恒心社の学習活動の性格を考察する。

日記には敬軒や周囲の人々の考え方や日々の生活が記されている。前者は彼ら自身の言葉で語られた思想である。まずはこれを検証し、加えて本論では、後者である日々の生活の記録を通して、言説に表れることのない思想をも明らかにしようとした。近世後期の一学習者であった敬軒を通して、当時の詩社における学習活動が明らかになるであろう。本論は、従来明らかにされてきた当該時期の学びの諸相に、さらに新たな一面を加え、より明確な全体像に迫ろうとする試みである。

表1 恒心社友一覧

人名	別称	生年	没年	事蹟	著書
東恒軒	君孚・吉尹	1763	1815	医家。久田常瑛の子、後東氏を継ぐ。	論語解・勢江集・恒軒稿
大冢渥美	白水・子躍・鱗	1764	1819	医家。信濃国伊奈郡駒場駅の人。	
高木舜民	呆翁・周蔵・厚之・勘助	1766	1844	宮崎文庫管掌の高木永年の子。岡本花亭に学ぶ。	梅譜・竹譜・蔬譜・音癸例・詩文集
山口凹巷	聯玉・長次郎・鷺	1772	1830	平師職御師。孫福白堂の子。山口豹山の養子。橋村痴亭、皆川淇園に学ぶ。源応瑞の紹介で、寛政3年6月4日皆川淇園に入門。	東奥紀行・王阮亭詩抄・緑窓詩話・桜葉館詩文集・蘇州高大史二詩抄・北越遊稿・芳野遊稿・泉南紀行
河崎敬軒	良佐	1772	1818	三方家春木氏代官。皆川淇園に学ぶ。	黄葉夕陽村舎紀行・斎宮略・檢塾日記・驥嶽日記
池上徳隣	隣哉・成斎	1778	1819	三方家春木氏代官。山口凹巷の門人。	
西村維祺	宜堂・及時・看雲・看松・鶏助道人・甘露堂主人・濫巾居士・友石	1778	1838	平師職御師。西村光春の子。財産家。一度仏門に入り、後再び還俗する。	忘路集・估華
宇仁館雨航	清蔚・信富・太郎大夫	1779	1841	平師職御師、方位家。	浪花竹枝百首・勸懲輯略・詩家指掌
大塚雲陶	不齋・寿・士瞻・東平	不明	1815	子躍の子、文化12年乙亥3月死去。	
西村子賛	竹坡	1781	1857		
来田本親	子固	1782	1855	外宮権主典。	
幸田伯養	柳所・松崖・要人	1789	1849		
東夢亭	伯頌・梅庵・文亮・一学・石潤	1791	1849	清水泰亮の子、東恒軒の養子。医家。始め山口凹巷に就き、後父に医学を学ぶ。文化6年に京都へ出て韓天錫の塾に入る。山田へ帰り塾を開く。	五代史註釈・唐詩正声箋註・鉏雨亭隨筆・夢亭詩文集・夢亭詩鈔
孫福包蒙	孟緯・公寛・公裕・楓窓	1791	1853	山口凹巷の甥。外宮に出仕し、正六位上に至る。東恒軒に学ぶ。寛政4年1月19日、山口鷺の紹介で、皆川淇園に入門。	
池上菊所	希白・衛守・易中	1808	1862	春木隼人の家来。徳田椿堂に俳諧を学ぶ。	梅室附句全集
佐藤幹員	子文・不除軒	不明	不明	富豪にして漢詩俳諧茶道に通じる。	杞菊園遺稿

出典：『校訂伊勢度会人物誌』により作成。

## 1, 恒心社の社友

恒心社の結成がいつであったのか現時点では明らかでないが、「恒心社詩録一」の起稿が享和2(1802)年9月であることから、これが初会とされる<sup>(4)</sup>。敬軒の日記に出てくる詩会の会者をすべて数えると約40人であるが、その中には一度しか名が出てこないものもあった。さらに、通称や号で記されており、すべての人物を特定することはできなかった。社友の総数は多くても30人ほどであったろうと思われる。表1にはいくらか事跡の確認できた16名をあげた。

ここから恒心社の社友には御師や医者が多いことがわかる。御師には、神宮家、三方家(山田)及び会合家(宇治)、町年寄家、平師職家の四階級があった<sup>(5)</sup>。その下に苗字を名乗ることのできる殿原と苗字を持たない仲間と呼ばれる一般住民が位置した。彼らが全国の檀家を回り、「伊勢暦」に代表される様々な土産を配り、初穂料を回収した手代や、職人、商人であった。内宮の所在地宇治と外宮の所在地山田は、豊臣秀吉以来、守護不入の特権が認められ、三方家及び会合家を中心とする住民の自治都市として存在した。中世以後庶民の神宮崇敬が高まり、伊勢参宮が盛んになって、宇治山田は繁栄し経済的に恵まれた。恒心社社友は、経済的余力を持っていた人々であるといえるだろう。

享和2年を恒心社結成の年とすると、盟主の凹巷、敬軒はともに31歳となる。彼らより年長者は東恒軒、大塚白水、高木舜民などがあるが、概して30代前後の比較的若い層を中心としていたことが分かる。

盟主である山口凹巷は安永元(1772)年山田一志久保町の孫福白堂の次男として生まれた。通称長二郎、後に曾弥町の師職山口氏を嗣いで、角太夫と称した。凹巷は、橋村痴亭、皆川淇園に学んだ。橋村痴亭は、師職で外宮権禰宜の橋村正身の長子である。父正身は山田上中之郷町に塾を開き和漢の学を教えた。また、毎月の式日には宮崎文庫に出席して神典を講じた。痴亭は父に国学を、漢学を伊藤東涯に学んだ<sup>(6)</sup>。皆川淇園についたのは、寛政3(1791)年5月29日のことである<sup>(7)</sup>。凹巷について、『校訂伊勢度会人物誌』<sup>(8)</sup>は「官を勧むるものあるも辞して就かず、酒を蒙り痛飲日夜に涉り、又山水の癖あり、釣を楽しみ悠々自適した」と伝える。同じく恒心社の主要メンバーであった河崎敬軒(1772-1818)も、皆川淇園の門下であるとされる<sup>(9)</sup>。敬軒は号で名は良佐であった。北条霞亭も寛政10(1798)年に皆川淇園に入門しており<sup>(10)</sup>、ここでの出会いが後の交友のきっかけとなった。

霞亭に他家へ養子の話が持ち上がったとき、これを思いとどまった経緯を記した書簡については、尾形尙

が明らかにしている<sup>(11)</sup>。ここには凹巷と敬軒の学問に対する姿勢をみるので、一文を引用したい<sup>(12)</sup>。凹巷と話合った敬軒は霞亭に向かって、「何分しりが少しあたまかなれば学問等に油断出来やすき間、是非是非二其心得成さる可き様、申され候」というのである。彼らは霞亭が養子に入り経済的に恵まれることで、学問に油断が生じることを案じた。経済的な安定は学問大成の敵と考えていたのである。

## 2, 社友の人生観

霞亭に対する凹巷・敬軒の忠告はどこから発していたのだろうか。いまいし彼らの考え方に分け入ってみたい。

凹巷は敬軒の父親の六十を祝う詩集に寄せた序に、次のように述べた。まず、「貧は学之資也、窮は道之達也、貧しからざれば則ち業を専にせず、窮せざれば則ち志振わず、貧と窮に及び、君子宜しく憂えざる所也(『学礼漫録四』)」として、学業の達成に貧と窮が糧となることをいっている。これは霞亭への忠告と同様の主旨とみてよいだろう。では学業の達成とは何をいうのだろうか。親を養うために「禄を挾ばすして仕え(同上)」、「学をして、則ち其の能を欲し、困て又榮有りて其の誉を広くするを欲す。仕をして、則ち其の忠を欲し、困て又過無く其の禄を守を欲す(同上)」ことは、「蓋し皆必ず願う(同上)」ことである。しかし、親は「財物禄食で悦と為すに足らず、以て夫れ学問道芸の養いを求む(同上)」のであるという。ここから、学業によって能力を身に付け、それによって仕え禄を守ることが学問の目的ではなかったことが分かる。凹巷と異なり、敬軒は禄仕せざるを得なかった。「然れども良佐禄利において澹とし、退いて室に居り、家事を問わず、蕭然として著書を以て努と為(同上)」したと凹巷は評価した。禄仕する身でありながら、禄利にこだわることなく、学問道芸にいそむ敬軒の姿が描かれている。このような姿が理想の生き様であったと思われる。

また、敬軒は日記に次のような言葉を残している。まだ若く師について学ぶ者は、一生かけても成し遂げられないような壮大な志を持っているが、若者は血気盛んであり声色に心を移し、怠け者になってしまうことがある。これが四五十になると血気は衰え、皆各己の身を修め家を守ることに終始し、志は「利欲の奪う所と為し、多く廢弛に至る(『敬軒日記八』文化10年10月9日)」という。これを「学者の一大厄(同上)」としている。恒心社結成当時、社友はおよそ30代であった。来るべき40代50代に訪れる「学者の一大厄」に対する備えであったとも考えられる。さらに「声色

之厄、尚去るべし、苟も利欲の為に、此膝一たび屈すれば則ち復た伸ぶべからず、懼るべき哉（同上）」と、学問を志そうとするものにとって、利に屈することの恐ろしさが強調されている。

利欲に屈することを恐れたのは敬軒だけではなく、社友に共通の意識であった。それは、次のような事からうかがえる。

夕、凹巷、呆翁、子亨、孟綽至り同に清蔚を訪う、云う、出て口本里松爪氏に在り。往いて鼓月亭に到る、折簡、再三清蔚を招き遂に至る。清蔚年来、経業家事、瑣々趨末、日に俗流に伍す。其の本心表し、今学を以て告ぐる者、各一大事有りて諫争懇々、亦一箇老婆心切（『敬軒日記八』文化10年9月19日）。

社友の一人清蔚が問題の人物である。この人も御師であった。数人で彼を訪ね、留守であることを知ると、手紙で皆の集まる鼓月亭に呼んだ。最近の清蔚は家事に煩わされて、こせこせと日を送り俗流の仲間となつてしまった。これに対して社友はそれぞれ思うところを「懇々」と諭したのである。清蔚を思いやる気持ちだが、「老婆心切」という言葉に滲むかに思われる。この後9月30日の日記にもこれに関する記述が見られた。

出浴更に酌み、社友得失を論ず。凹巷曰く、清蔚短命相伝有り、精修学業、其心胸を潤げれば或は免ず。今区々俗を遂げ妻孥に称良せられ、主人揚々自得、抑も危道矣。（『敬軒日記八』文化10年9月30日）。

ここでも清蔚が社友に諫められた具体的な原因は明らかではない。ただ、学業に専念せず、家政に力を入れ、その成功に得意になっていることが問題とされていることが分かる。凹巷をはじめとする社友の諫言を清蔚は受け入れた。それは、凹巷が交誼に厚く、その言葉は真実を語るものであるからで、「懇に告ぐるに到って誰か感激せざる所あらん乎（同上）」と敬軒は述べている。

このような例から、恒心社では家政に精を出すことは利に趨ることであり、悪とされていたことが分かる。逆に善とされたのは、区々としたことに煩わされず、「精修学業、其心胸を潤」げることであった。先に述べたように恒心社友には御師が多く含まれていた。御師の収入は毎年定期的に手代が各地の檀家を廻って得る初穂料であった。よって、しばしば檀家獲得をめぐる争いが起こった<sup>(13)</sup>。彼らは、はげしい経済競争の中にあつた。経済的に恵まれてはいたが、反面ややもすれば浮華に流れ、利に趨る危険性を自ら充分感じていたのではないだろうか。だからこそ、「家事を問わず、蕭然として著書を以て努と為」す生き方を理想とし、「精

修学業」が目指されたのであろう。

しかし、このような人生観は現実の世界で受け入れられるものであつただろうか。酒造業を営むかたわら、学芸百般に通じ稀書奇物の蒐集家でもあつた木村兼葭堂が「家事は固より廃せざる所」と述べ、学芸によって家業を陥さないことを信条としていた例などとは対照的である<sup>(14)</sup>。恒心社の外の世界に受け入れられたのは、むしろ清蔚のような人物であつただろう。であるから「妻孥に称良せられ」たのである。恒心社の人生観は、現実世界では許容しがたいものであつたといえよう。ところが、当時の漢詩の世界観とは共通するものであつた。江戸前期の詩人石川丈山は、詩仙堂に隠棲し、三十六家詩仙の像を掲げて敬慕し、禄もなく、妻も娶らず、子もなく、ただ読書と詩文を以て自ら楽しみ、文字に酔い、文詠に寝食を忘れる日々を送つた<sup>(15)</sup>。恒心社が理想としたのはまさにこのような生き方ではなかつただろうか。それは彼らの詩からもうかがうことができる。前二篇は敬軒のもの、後の一篇は凹巷の詩である。

同霞亭訪瓦全翁

洛泐久聞有此翁 訪来何必姓名通  
松風映壁茶烟細 一室閑情夢想中  
霞亭と同に瓦全翁を訪う  
洛泐に此の翁有りと聞くこと久し  
訪れ来るもの何ぞ必ずしも姓名を通さん  
松風壁に映じ茶烟細し  
一室の閑情夢想の中 （『敬軒藁』）

同厚之聯玉訪子讓

偶訪主人醉臥時 琴書狼藉任風吹  
窓前一櫺千尋影 吐月山当第幾枝  
厚之聯玉と同に子讓を訪う  
偶たま訪うに主人醉臥の時  
琴書狼藉風吹に任す  
窓前一櫺千尋の影  
吐月山当第幾枝となす （『敬軒藁』）

[無題]

細火携残又酒樽 一星吹滅乞誰温  
路逢此老留還酌 羨説梅辺是我村

[無題]

細火携え残り又酒樽  
一星吹いて滅す誰にか温を乞わん  
路に此老に逢い留めて還た酌む  
梅辺是れ我が村と説くを羨む

（『敬軒日記三』文化7年2月13日）

はじめの詩では、一人の翁を訪ね、名前など世俗の

表2 文化6年の例会

日付	会場	詩題	
		宿題	席上作
1月24日	来田氏	梅花	席上咏斎前木蓮花
3月28日	桜葉館	咏桜葉	桜葉館集寄懷館主聯 玉在北得微
4月27日	不明	紀北宗親婢事	同諸君遊蓮堂寺得灰
5月26日	不明	同漑蘭凹巷宜堂霞亭佐 藤生山内生冷舟南江	なし
6月11日	神護寺	山齋午睡	水底雲影得微
7月16日	慶宝寺	秋柳	慶宝寺席上作得巖字
8月16日	中山寺	名勝月十首	なし
9月11日	遷宮竟宴宇仁館	風不鳴條	齋居
11月12日	慶宝寺	櫃子	乾菜

出典：『敬軒藁』。

ものに一切煩わされることなく一杯の茶でもてなされる。その静かな心の様はまるで夢の中のような。また、次の詩では、友人を訪ねると彼は酔って眠ってしまっている。辺りには琴書がちらかって吹く風に任せている。既に月がかかり窓には幾重にも枝の影が映っている。最後の詩は、残り火で酒を温め詩を作り続ける、しかし一陣の風が吹いて火を消してしまっははどうやって暖をとることができるだろうか。そこに通りかかった老人を留めてさらに酒を酌むと、梅の花咲くあちらが私の村だという。ここには、酒を友とし、書や音楽に親しみ、為すがままに生きる、そういった姿が描かれている。これは、恒心社友の実際の姿である以上に、理想として追い求めた姿であっただろう。漢詩の世界観は、恒心社社友の人生観と通じるものがあったといえるだろう。

### 3, 日々の活動

恒心社の日々の活動は、どのようになものだっただろうか。日記からみる限り、敬軒のあらゆる交友関係は恒心社友を基盤としており、日常的な付き合いは恒心社友に限られていたといってもよい。敬軒はほぼ毎日、社友のいずれかの家を訪れ、ともに酒を酌み詩を賦した。また、釣りや山歩きもしばしば行われた。

雞鳴起る、飯いて出ず。月に従い池畔を歩き河崎里に至る、秋月歩に迎い漸に細きこと糸の如し。双店に至れば已に曙、江天明淡、宿雁一声在りて、簾葭烟水の外。釣具を理め舟に上る。黒瀬叢祠を過ぎて、旭日彩を拖く、温酒下釣、真に明夜詩中之境を得る矣。須臾、呆翁一鱗を得、子亨又釣り、將に水を出んとし躍て落つ(『敬軒日記八』文化10年9月28日)。

まだ暗いうちから、釣りの支度をととのえ舟に乗り込み、朝日を眺めながら酒を酌む。これぞまさに詩の境地と満足げな様子が記されている。夜は「釣る所の魚を煮るを欲し、共に清蔚宅に過ごす。子亨を招き入浴後残尊を酌み舟中談作を評す(同上)」とあり、社友の家に集まり、その日の作を評したことが分かる。

社友はそれぞれ作った詩を評価し合った。日記には「夜、凹巷を訪い社友の詩を評す(『敬軒日記四』文化8年12月2日)」といった記述がよくみられる。凹巷

と敬軒が中心となっていたであろうことがうかがえる。その敬軒も凹巷には、絶対的な信頼を寄せていた。

月下詩を賦し文を論ず。凹巷曰く、近日良佐の詩大に進み、五律、七絶、稍く格然に及ぶが如し、其古詩未だ乳臭を免れず、七古無斧鑿痕に至らず、則ち詩人と謂うべからざる也。予謹みて教を受く。是夜韓氏において同宿、各六言律を賦し分韻して秋字を得る(『敬軒日記七』文化10年9月12日)。

敬軒と凹巷は同年齢であった。しかし、ここには凹巷を漢詩の師として仰ぐ姿勢がみられる。恒心社友の間では、凹巷を中心として、詩稿の校正はもちろん、碑文等の筆削も行われていた。詩稿については、北条霞亭の『嵯峨樵歌』を校正したことを記す次のような一文がある。

凹巷、宜堂、霞亭嵯峨樵歌を不除軒にて校正す(『敬軒日記四』文化8年12月9日)。

この詩集が世に出たとき、霞亭は「数本を携え来たり、社友各一冊を分贈(『敬軒日記五』文化9年8月4日)」し、社友に感謝の気持ちを表した。

また、次のような例もあった。

未牌、凹巷、清蔚と共に神護精舎に会す。清蔚撰ぶ所の山田大路訥齋碑文を読む、凹巷筆削数句、予亦傍観取捨三四言、夕、子亨又来る(『敬軒日記八』文化10年10月11日)。

ここにいる山田大路訥齋とは、杉田玄白について学び、故郷で医業に力を尽くしたが、治療活動中に命を落とした医者である<sup>(16)</sup>。山田大路訥齋の碑文を恒心社友である宇仁館雨航(清蔚)が書くにあたって、凹巷、敬軒、子亨3人の社友が協力した。このような集まりの時には、「業卒りて後、清蔚酒を設く、予酔いて席上に賦す(『敬軒日記八』文化10年10月11日)」と、必ず酒宴が設けられ詩を作ったが、時には度を越して「凹巷怒り乱拳吾頭を打つこと再三、何ぞ畜に石(勅)李(陽)之老拳毒手のみならんや(同上)」ということ

表3 文化7年の例会

日付	会場	詩題		会者
		宿題	席上作	
1月22日	桜葉館(聯)	霞	初春歩園得寒字	君孚・聯玉・維祺・子讓・清蔚・子固・不騫・伯養・孟緯・太常君・松窓君
2月3日	流憩所	咏紙鳶	なし	呆翁・凹巷・敬軒・霞亭・孟緯・数之
3月19日	孫福孟偉宅	采茶歌	送来田子固遊湖東	不明
4月27日	教王山南房	なし	蕉葉・隋堤柳・小仙遊・煎茶	凹巷・霞亭・白水・敬軒・孟緯・清蔚
(儉)5月13日	不明	新竹	夏日田家雜興	池隣哉・石仲介・池希白・広省吾
(儉)5月22日	池上氏	夏山	夏夜雨得侵・成齋集次韻大家生贈主人隣哉	敬軒・恒軒・不騫
(儉)5月23日	来翠楼	夏意	来翠楼即事	敬軒・孟緯・希白・仲介・子贊・大稿
(儉)6月3日	池上氏		反舌無声	不明
6月6日	慶宝寺	咏簑	風蘭	不明
(儉)6月10日	池上子玄宅	なし	賦鴛鴦賀孫孟偉新昏	不明
(儉)6月22日	不明	豫護擊衣図	驚風入午暑	不明
6月27日	慶宝寺	消暑	武石問答	不明
7月23日	教王山南房	露	田園秋興二首	凹巷・子讓・不騫・孟緯・子文・隣哉・仲介・省吾・角田・敬軒
(儉)8月2日	慶宝寺	鴨川四時歌	同諸子遊慶宝寺	不明
8月13日	教王山南房	仲秋讌集序	南院詩席時近仲秋新晴記喜	不明
(儉)8月26日	南院	浪華雜詠	夢	不明
9月22日	流憩所	歴代詠史北周	なし	聯玉・敬軒・孟緯
(儉)9月27日	不明	秋林抱琴図	夜看菊花	敬軒・隣哉・子玄・孟緯・仲介
10月25日	竹坡山荘	柳	山荘十勝	恒軒・凹巷・敬軒・孟緯・伯頌・子亨・子文・立敬・仲介・隣哉
10月29日	聚口楼	なし	冬山得十二文・歴代詠史	恒軒・凹巷・伯頌・立敬
(儉)11月17日	孫福氏	なし	冬暖	不明
11月22日	池隣哉宅	咏五色七律	成齋夜話	恒軒・敬軒・凹巷・孟緯
12月24日	岡田叔始宅	咏藤梅	寒鴉	不明

注：日付の前の(儉)は、儉閑社例会を示す。

出典：『敬軒稟』、『敬軒日記三』。

もあった。

このように、恒心社友は日常的な様々な活動をとみにした。その中心には漢詩があった。ここには、経書を読み知識を深め聖人君主を目指す学問は見られない。

#### 4、例会について

ここでは、恒心社の詩会がどのくらいのペースで行われていたのかを見ておきたい。『敬軒稟』は、敬軒が、文化4(1807)年から文化10(1813)年にわたる自らの詩作を記録したものである。ここには日々の生活の中から生まれた詩、詩会が行われた時に作った詩が記されている。詩題の下に、「正月二十四日、例会、来田氏」

などと注が書き込まれており、例会の日にも、会場を知ることができる。文化6(1809)年に行われた例会をあげると表2のようになる。

この時期、例会はおよそ月に一度のペースで行われていたことが分かる。また、会場は固定されておらず、毎回替わっている。注には「宿題」「席上作」といった書き込みがある。例会では、期日までに作っておいた詩を持ち寄る「宿題」と、当日題を撰んで作詩する「席上作」の二種類の方法が行われていたことが分かる。

例会の会者は『敬軒日記』によって知ることができる。現存する『敬軒日記』は、恒心社結成以前の寛政6(1794)7月～同8年2月までのものが1冊と、文化7

(1810)年1月から文化14(1817)年9月にいたる10冊である。よって残念ながら、恒心社結成当時のことを知ることはできない。尾形侑が明らかにするところによれば、享和2(1802)年9月南院を会場に行われた初会の会者は、大塚麟、冢本時修、河崎良佐(敬軒)、西村維祺、山口凹巷の5人であった<sup>(17)</sup>。二回目で東恒軒、三回目では高木舜民が加わった。彼らが結成当初のメンバーであった。しだいに社友が増え、『敬軒日記』に見られる例会の会者は、毎回10人前後であった。

『敬軒日記』の例会の記録を追っていくと、恒心社とは異なる詩社の名が出てくる。それが儉閑社である。この詩社の結成のいきさつは次のように記されている。

池隣哉、石仲介、池希白、広省吾、社を結び詩会を為し、評正を凹巷に乞う。予社に命じて曰く儉閑、是日始て会す。宿題予亦与う(『敬軒日記三』文化7年5月13日)。

儉閑社では凹巷が詩を評し、添削したことが分かる。また敬軒が社に命名し、初会の宿題を与えていることから、彼もまた指導的立場にあったことがうかがえる。儉閑社の活動が始まると、日記に見られる例会の頻度は非常に高くなった。表3に儉閑社が結成された文化7(1810)年の例会をあげる。

儉閑社例会の会者については記録されていないことが多く実体は定かではない。しかし、儉閑社の社友として名があがっている人物は、みな恒心社の社友であった。また、会場も恒心社例会と同様の場所が使われていた。「宿題」と「席上作」、二つの作詩方法が採られていたことも共通する。このようなことから、儉閑社は恒心社に含まれる下位組織として存在していたのではないかと考えられる。

儉閑社例会の記録は、文化9(1812)年まで多くみられるが、それ以後はまれになる。儉閑社の例会自体行われなかったか、敬軒が参加しなかったということが考えられるが、現時点では明らかにならない。

## 5、「郷校」の設立計画

文化10(1813)年恒心社友は、新しく小亭を築いた。そのいきさつは『敬軒日記』に次のようにある。

是日藤丘亭匾を掲ぐ、凹巷匾背に記す。  
癸酉初夏、社友と与に相謀りて藤丘北亭に小亭を築く。南面山裙腰の農畝、亭成之時多雨属き、其の所を以て亭に名つくるを思うに果さず。適に友人霞亭備西に遊び、菅茶山翁を黄葉村舎に訪いて帰る、装を解くに隙余翁筆する所の鉏雨二大字、諸壁に之を掲ぐを乞うに困りて遂に亭名と為す、名と景境蓋し数有る如し(『敬軒日記七』文化10

年5月15日)。

新しく築いた亭に掲げる額の裏に、凹巷が記した言葉を敬軒が日記に写し取ったものである。雨の多い時期に完成した亭にふさわしい名を付けようとしたが決めかねていたところ、備後の神辺から帰ってきた霞亭の荷物の中に、菅茶山の筆になる「鉏雨」の二字を見つけた。これをもらい受け、亭に掲げてその名にすることにしたのであった。

霞亭の神辺訪問は、菅茶山の招きによるものであった<sup>(18)</sup>。茶山は霞亭の詩集『嵯峨樵歌』に序文を寄せたのであるが、それによって霞亭の才能を見だし、廉塾の都講にと望んだ。霞亭は弟立敬とともに、この年の3月10日から15日まで廉塾に滞在した。

こうして新しい亭は鉏雨亭と名付けられ、5月27日には恒心社の例会が鉏雨亭で行われた。先述したように、それまで例会の会場は毎回替わっていたが、これ以降はほとんど鉏雨亭で行われるようになった。

鉏雨亭の設置の目的は、例会の会場としての役割を果たすのみではなかった。凹巷と敬軒はさらに次の計画を持っていた。

薄暮、亭を出て、子亭、孟綽先に帰る。予送りて凹巷に至る。酒を呼び又ト地を謀りて曰く、数間之屋を構え社中の書数部を置く、凡そ必其処において書を読み業を肆にす、後に漸んで一郷校と作す(『敬軒日記七』文化10年8月23日)。

社中の書籍を集めておく文庫を設けるというものである。また別の日には「亭の側に買うべき地有り、予の意謂、明年館之、又明年堂之、数年、書院之規制全わん(『敬軒日記八』文化10年11月1日)」とあることから分かるように、鉏雨亭の側に文庫を建てる計画である。社友の学習はみなここで言い、後には「一郷校」に発展させようと相談している。

ここにいう「郷校」は、藩校の下に位置付けられるいわゆる郷校でないことはいまでもない。伊勢の地には官設ではなく同志の努力によって設けられた宮崎文庫、林崎文庫の二文庫があった<sup>(19)</sup>。宮崎文庫は、神官たちが遊墮安逸に流れることを憂えた外宮の神官出口延佳らによって、慶安元(1648)年に外宮の東隣豊宮崎に設立された。皇室、將軍、学者などから図書の奇贈を受け、仏書以外の漢籍、和書、歌集、医書など4,000部を集めた。文庫では図書の収集、閲覧、貸出の他、研修会、講演会なども行った。講演会を行った学者の中には、室鳩巢、伊藤東涯、井沢長秀、谷重遠、大塩平八郎、斉藤拙堂などがいた。宮崎文庫の活動に刺激されて、内宮側の宇治の自治を行っていた会合所の年寄たちが、元禄3(1690)年に設立したのが林崎文庫である。宮崎文庫とほぼ同様の活動を行った。恒心社が目

指していた「郷校」は、宮崎文庫や林崎文庫のようなものであったろうと思われる。

この計画に沿って、敬軒も自らの書籍をここに置くことにした。

今又予の所蔵を置く。聖影一幅四書二十六卷字彙十四卷、聯玉（凹巷）の楚辭、陶靖節集の如き巻を以て続き、社友亦各書一部、若二部を送れば、百千部に積み至る、経史子集、牙籤秩然、亦猶斯亭、館を為し、堂を為し、書院を為す（『敬軒日記八』文化10年11月1日）。

凹巷も同様に書籍を寄贈した。社友がそれぞれ一部、二部と書籍を寄せれば、亭は館となり、堂となり、書院となるだろうとする。そうすれば「蓋し社友の業進み孜々弗懈（同上）」となり、わが志を遂げることになるともいつている。その後、文化11(1814)年10月の日記には、社友樗軒（木曾稚一か）から大量の書籍が寄贈されたことが以下のように記されていた。

樗軒買う所の詩文集若干部凹巷に送る。（略）通計十九部六十冊（『敬軒日記十』文化11年10月9日）。

恒心社は凹巷や敬軒の考えに基づいて、書籍を備えた文庫を設け、社友のため学習の場を作ろうとしていたのである。文庫の設立について述べた先の文章には続けてつぎのように記されている。

一人廃弛すれば、二人之に従う。或は博奕を能し、声楽に流る、或は茶博士插花者流に伍し、或は難を嫌い易きに就き、雅馴を代するに侏離を以てす。曰く、我土に生き、我書を読む。実に用て彼は為す、或は内に妻孥に屈し、外に郷党を飾り、区々拘泥し、唯是れ利に趨る（『敬軒日記八』文化10年11月1日）。

一人の心が弛めば、これに従う者が出てくる。彼らは、ただ郷土に生き、書を読むといいながら、実のところは妻子に屈し、仲間に虚勢を張り、「唯是れ利に趨る」ようになるのだとしている。この「郷校」は、利欲に趨ることを避け、「精修学業」するという恒心社社友の理想の姿を実現するために構想されていたといえるだろう。

## おわりに

本論では、近世後期の一学習者であった河崎敬軒の日記を通して、当時の学習活動をみてきた。敬軒らが結成した恒心社は総数として30人弱の社友を有しており、山田の御師や医師など比較的裕福な者たちで構成されていた。社友たちは、学問大成のためには、利欲を離れなければならぬと考えていた。利欲を離れるとは、すなわち「家事を問わず」「精修学業」すること

であった。こうした彼らの人生観を投影するものが漢詩であった。

彼らが「学業」といい「学問」といい「学」といったのは、「財物禄食」のためのものではなかった。「精修学業、其心胸を潤」げるとい言葉に表されたように、学ぶことによって俗なる現実世界から離れて、心大らかに為すがままに生きることこそ恒心社社友の目指したものだ。

このような理想を実現するために、恒心社の活動は単に詩会にとどまらず、釣りなどの遊興、社友の詩稿の校正など日常的なさまざまな場に及んだ。例会は月に一度のペースで、社友のいずれかの宅に10人前後が集まって行われた。作詩は「宿題」と「席上作」の二種類の方法で行われた。また、恒心社の下位組織と思われる儉閑社の例会も開かれていた。さらに、恒心社は鉏雨亭という小亭を築き、これを基に社友の学習の場を作ろうと計画していた。月に一度例会を開き、固有の施設を作ろうとしたのは、形のない理想を少しでも形のあるものにしようとする試みではなかっただろうか。

敬軒の日々の生活に作詩が溶け込み、詩に理想の世界を詠んだように、彼らにとって漢詩は生活と切り離すことのできないものとして存在した。恒心社の学習活動は、朱子学でいうところの徳を実現し人格形成を目指す学問とも、知識や技術を身につけるための学問とも異なっていた。恒心社は、現実の世界から離れ自然に生きることを目指した人々の集まりであった。

本論は恒心社という一事例の検証にとどまったが、近世から近代にかけて、詩社が学習の場としてどのような働きをしていたのか今後も検討を進めていきたい。

## 注

- (1)両編とも『森鷗外全集』（著作篇第十卷、岩波書店、1953年）に収められている。
- (2)尾形仍「北条霞亭と山田恒心社（上）」（『文学』8-46、岩波書店、1978年）、「鷗外「北条霞亭」史料目録一 的矢文書・浜野知三郎旧蔵書文書一」（『成城国文学論集』17、1985年）。
- (3)辻本雅史『「学び」の復権—模倣と習熟—』（角川書店、1999年、p.12-13）参照。
- (4)前掲論文2「北条霞亭と山田恒心社（上）」（p.987）。
- (5)以下、御師については、三重県総合教育センター『三重県教育史』（第一巻、三重県教育委員会、1980年、p.87-91）を参照。
- (6)同上（p.183）参照。
- (7)宗政五十緒・多治比郁夫『上方藝文叢刊5 名家門



近世後期の詩社における学習活動

- 人録集』(八木書店ほか、1981年)所収の、「有斐齋受業門人帖 一」(p.69)に「寛政三年辛亥五月廿九日 伊勢山田人 山口長次郎 鷲 字馬卿 紹介源 応端」とある。
- (8)川端義夫『校訂伊勢度会人物誌』(古川書店、1975年)。
- (9)佐藤一夫は、『菅茶山記念館第三回特別展 北条霞亭の生涯と恒心社社友』(菅茶山記念館、1995年、p.23)に、敬軒が天明6(1786)年2月6日に入門したこと、それが凹巷の勧めであったと思われることを述べた。しかし、前掲注7の「有斐齋受業門人帖」では、河崎敬軒の入門の記録は確認できない。
- (10)前掲注7「有斐齋受業門人帖 二」(p.105)に、「寛政十年戊午春正月廿七日 志摩答志郡的矢村 北条 大学 元直 字恵夫十九才 紹介橋口立節 執事新 羅倍」とある。
- (11)前掲論文2。
- (12)以下に敬軒及び凹巷の「学問」「学業」「学」等の言葉を取り上げた。これらは当時一般的に使われたことばであるが、彼らのそれは、いわゆる知識を身につけるため、聖人となるため、あるいは立身出世のための学問ではなかったと思われる。
- (13)西垣晴次・松島博『三重県の歴史』(山川出版社、1974年、p.132)参照。
- (14)梅溪昇編『大阪府の教育史』(思文閣出版、1998年、p.p159-166)参照。
- (15)松下忠『江戸時代の詩風詩論—明・清の詩論とその 摂取—』(明治書院、1969年、p.27)。
- (16)前掲注8 (p.296)参照。
- (17)前掲論文2 (p.987)。「恒心社詩録」4冊については、尾形氏より孫福正氏が所蔵されていることをうかがったが、孫福氏が既に逝去され現在所在が不明である。
- (18)前掲注9『菅茶山記念館第三回特別展 北条霞亭の生涯と恒心社友』(p.30)。
- (19)以下、宮崎文庫および林崎文庫については、前掲注5 (p.p233-242)参照。

(主任指導教官：仙波克也)